

信行要文 ①

第十一回 法華講夏期講習会 第一期

（平成二十六年五月十八日）

皆さん、おはようございます。

平成二十六年度の法華講夏期講習会第一期に当たり、皆様方には深信^{じんしん}の登山、まことに御苦労さまでございます。

明年の日興上人御生誕七百七十年の佳節までは、残り十ヵ月を切っております。すなわち、御生誕は三月八日でありますから、来年は実質的に一月と二月の二月^{ふたつき}しかありません。そうしますと、もう五月でありますから十ヵ月を切っており、残り九ヵ月と半分ぐらいになるわけであります。

私達は今、すべての支部が必ず、御本尊様の前でお誓い申し上げました法華講員五〇パーセント増の誓願を、なんとしてでも達成しなければならないなかで、一番肝心な時期に来ているのでありますから、一人ひとりの方が、真剣に折伏に取り組んでいていただきたいと思う次第であります。

つきましては、今回は、既にお手元にお渡ししてありますテキストの『折伏貫徹のために』ということを含めて、話をしていきたいと思えます。

最初に『法華初心成仏抄』であります。

1 法華初心成仏抄

「利根鈍根^{ひと}等しく法雨を雨らす」と説き、「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提^{あ のくた らさんみやくさんぼだい}は皆此の経に属せり」と説くは^{いか}何に。此等の文の心は、利根にてもあれ鈍根にてもあれ、持戒にてもあれ破戒にてもあれ、貴きも^{いや}あれ賤しきもあれ、一切の菩薩・凡夫・二乗は法華経にて成仏得道なるべしと云ふ文なるをや。（御書一三一―一三三行目）

まず、この『法華初心成仏抄』は弘安元（一二七八）年、大聖人様が御年五十七歳の時に^{したた}認められた御書であります。

対告衆^{たいごうしゆ}につきましては、岡宮^{おかのみや}の妙法尼という説もありますが、定かではありません。

この『法華初心成仏抄』という題号は、その内容の上から、おそらくのちに付けられたものと考えられます。

題号のうち「法華」の二字は所依^{しよえ}の経を示し、「初心成仏」の四字は信行者の果徳を顕しているのであります。

また「法華」の二字は、一往は法華經の意であります、再往は、本抄に、

「末法当時は久遠実成の釈迦仏・上行菩薩・無辺行菩薩等の弘めさせ給ふべき法華經二十八品の肝心たる南無妙法蓮華經の七字計り此の国に弘まりて利生得益もあり、上行菩薩の御利生盛んなるべき時なり」（御書 一三一二頁）

と仰せでありますから、法華經の肝心たる南無妙法蓮華經のことを指しているのであります。

そして「初心」とは、初めて発心し、仏道を志すことを言いますが、末法初心の行者が妙法によって成仏できることを明かされているところから、この題が付けられたものと思われまゝ。

次に、本抄の内容について簡単に申し上げますと、本抄は『立正安国論』などと同じように、問答形式によって諸宗の正邪を論じ、南無妙法蓮華經が末法弘通の大法であることを明かし、末法初心の行者が成仏できることを述べられております。

最初に、諸宗のなかで法華宗のみが、仏が立てられた宗であるとされ、他宗は皆、仏滅後の人師や菩薩が立てた宗なるが故に、末代においては、その所依の經典と共に滅尽すべきであると断ぜられます。そして、法華經のみが仏の本意であり、成仏の法であることを述べられ、末法今時には法華經二十八品の肝心である南無妙法蓮華經のみが、成仏のための要法であると明かされているのであります。

次に、法華經が一切經の根本となる大白法であることを示し、よき師と、よき檀那と、よき法の三つが寄り合つてこそ、祈りがかない、人も国も救われることを明かされております。また、無智の人も妙法五字の功德によって成仏できると明かされております。

最後に、成仏の原理を示され、籠の中の鳥の譬えに寄せて、南無妙法蓮華經と唱える者は己心の仏性を呼び覚ますことができると示され、我慢偏執の心なく、無疑日信の信心をもって唱題に励むよう、勧められているのであります。

さて、本文に入りますと、「『利根鈍根等しく法雨を雨らす』と説き、『一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に属せり』と説くは何に」とありますが、この御文は、法華經はただ二乗のためであつて、菩薩のためではなく、菩薩は爾前經で得道したという説の誤りを破折しているなかの一文であります。

少し前文を拝しますと、法華經はただ二乗のためであつて、菩薩のためではないという誤った説は、天台大師が出世する以前、中国に「南三北七」といって、江南すなわち長江の南に三師、河北すなわち長江の北に七師がいて、その十人の学者が立てた説である。しかるに天台大師は、それらの説をことごとく破折して、一代聖教のなかで法華經が第一であることを宣揚された。したがって、もし法華經には菩薩得道の義がないと言ふならば、それは間違いである。例えば、法華經の方便品第二には、

「菩薩是の法を聞いて 疑網皆已に除く」（法華經 一二四頁）

とあり、菩薩が法華經の説法を聞いて、様々な疑問がすべて解決し、仏の教えを領解

することができたと説かれているのであるから、法華経には菩薩の^{とくやく}得益がないなどということは、けっして言えない。それでもなお、鈍根の菩薩は二乗と共に法華経で得益したが、利根の菩薩は爾前経によって得益したという誤った説を主張するならば、法華経薬草喩品第五の、

「利根鈍根に 等しく法雨を^ふ雨らして云云」（同 二二四^ぶ）

の文、同じく法師品第十の、

「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、皆此の経に属せり」（同 三二八^ぶ）

の文は、どのように解釈すればいいのか、と大聖人様が反論されているのであります。

すなわち、初めの「利根鈍根に 等しく法雨を雨らして」という薬草喩品の御文は、妙法が等しく無量の功德を及ぼす様を、雨が平等に大地の万物を^{うるお}潤すことに譬えて、妙法の功德は、利根の菩薩であれ、鈍根の菩薩であれ、すべての菩薩に等しく及ぼしているという意味であります。

また、次の「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、皆此の経に属せり」という薬草喩品の御文のうち、「阿耨多羅三藐三菩提」とは仏の悟りや智慧が無上・無比で、平等にして円満であることを言います。これを分解しますと、「阿耨多羅」は無上の意で、これより勝れるものがないこと、「三藐」は正等とか正遍の意で、清浄にして^{へんば}偏頗のないこと、「三菩提」は正覚とか真道の意で、仏の完全な悟りを言います。結局、当文の意は、利根であれ、鈍根であれ、一切の菩薩の最高の悟りは、ただ法華経によるのであると仰せられているのであります。

ここで、利根とか鈍根という語が出ましたが、利根の菩薩とは、^{そな}鋭利な五根を具えた菩薩のことで、例えば、^{もんじゅ}文殊菩薩、^{ふげん}普賢菩薩、^{みろく}弥勒菩薩などがこれに当たります。対する鈍根の菩薩とは、才覚や機根の鈍い菩薩のことで、機根が未熟なために仏の説法を直ちに領解できない菩薩を言います。

そのような利根と鈍根という区別がありますが、ここで「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、皆此の経に属せり」と仰せのように、この法華経によって一切の菩薩が得益したことを示されているのであります。

次に「此等の文の心は、利根にてもあれ鈍根にてもあれ、持戒にてもあれ破戒にてもあれ、貴きもあれ^{いや}賤しきもあれ、一切の菩薩・凡夫・二乗は法華経にて成仏得道なるべしと云ふ文なるをや」と仰せであります。これは先の二つの経文、すなわち薬草喩品と法師品の御文の意味について述べられているところでありす。

つまり、先の二つの御文の意は、利根であれ鈍根であれ、あるいは持戒であれ破戒であれ、あるいはまた貴人であれ賤民であれ、すべての菩薩、すべての二乗、すべての人天等が法華経によって得道したことを示されたものであるとして、法華経は二乗のためだけに説かれたとの邪説を破折されているのであります。

皆さん方も聞かれたことがあると思いますが、法華経は「^{かいじょう}皆成仏道」とか「十界皆

成」と言われるように、十界の衆生がことごとく成仏すると説かれております。したがって、それがたとえ悪人であれ、二乗であれ、女人であっても、妙法信受の功德によって、すべてが成仏すると説かれているのです。

御存じのように、悪人成仏の代表が提婆達多です。また、女人成仏の代表が竜女であります。これらも皆、法華經によって成仏することが説かれているのでありまして、これが法華經に示される大きな功德であります。

したがって『兄弟抄』には、

「夫法華經と申すは八万法蔵の肝心、十二部經の骨髓なり。三世の諸仏は此の經を師として正覺じょうを成じ、十方の仏陀は一乗げんもくを眼目として衆生を引導し給ふ。今現に經蔵げんに入って此これを見るに、後漢ごかんの永平えいへいより唐とうの末に至るまで、渡れる所の一切經論に二本あり。所謂いわゆる旧訳の經は五千四十八卷なり。新訳の經は七千三百九十九卷なり。彼の一切經は皆各々分々に随われつて我第一ななりとなしかのれり。然るに法華經と彼の經々とを引き合これはせて之を見るに勝劣天地なり、高下雲泥なり。彼の經々は衆星の如く、法華經は月の如し。彼の經々は灯矩星月の如く、法華經は大日輪の如し」(御書 九七七〇)

と仰せであります。

この御文の最後に「彼の經々は衆星の如く、法華經は月の如し。彼の經々は灯矩星月の如く、法華經は大日輪の如し」とおっしゃっておりますが、灯矩の「灯」はともしび、「矩」はたいまつのことです。

例えば、釈尊の一代聖教においては、日輪が法華經に譬えられるのに対して、灯矩・星月は爾前権經に譬えられます。また、日蓮大聖人様の仏法を日輪に譬えるときは、灯矩・星月を釈尊の一代聖教に譬えるのであります。すなわち、一代諸經のなかにおいて法華經が他に比類なく、最も勝れていることの譬えとして、「彼の經々は衆星の如く、法華經は月の如し。彼の經々は灯矩星月の如く、法華經は大日輪の如し」と、このように比較して仰せられているのであります。

つまり、ここでおっしゃっている意味は、法華經がいかに勝れておるか、法華經によってあらゆる十界の衆生が成仏をせられるということを仰せられているのであります。

次も、同じく『法華初心成仏抄』の御文について申し上げます。

2 法華初心成仏抄

仏になる法華經を耳にふれぬれば、是これを種として必ず仏になるなり。されば天台・妙楽も此の心を以て、強しひて法華經を説くべしとは釈し給へり。譬えば人の地に依りて倒れたる者の、返たつて地をおさへて起つが如し。地獄には墮おつれども、疾く浮かんで仏になるなり。当世の人何となくとも法華經に背とがく失たに依りて、地獄に墮おちん事疑ひなき故に、とてもかくても法華經を強しひて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし、

ぼう ぜん者はどく 鼓の縁となつて仏になるべきなり。何^{いか}にとしても仏の種は法華經より外^{ほか}になきなり。(御書一三一六^ぎ二行目)

この御文の前のところを拝しますと、声聞・縁覚の二乗について述べられておりました、声聞・縁覚の二乗は三界六道から離れるという、

「悪道におちざる程の利益」(御書 一三一六^ぎ)
はあったとしても、灰身滅智^{けしんめつち}を究極の理想として仏種をも断じてしまう故に、成仏できないとされています。

この灰身滅智とは、小乗教における二乗の最高の果徳にして、理想の境地とされるものでありますが、三界六道のあらゆる煩惱を断じ、無余涅槃の悟りに入って再び三界に生じないために、一切の苦・煩惱が生ずる拠り所である自分自身の色身をも焼き尽くし、心智すなわち、心の本体とその作用さえも滅失してしまう、つまり色心の両面を滅してしまうということでもあります。

したがって、天台大師は『法華玄義』に、

「二乗根敗、反復すること能^{あた}わず」(学林版玄義会本下 九九^ぎ)
と仰せられ、二乗は仏と成るべき仏種をも断じてしまう故に、再び生ずることができず、成仏できないと仰せられているのであります。

つまり二乗は、灰身滅智によって色心の両面を滅してしまうことになりますので、衆生に本来、内在している成仏の種子、仏種までも焼き尽くすことになり、その結果「焼種の二乗」と言われます。つまり、種を焼いてしまえば、その種からは絶対に芽が出ないように、二乗は絶対に仏に成れないということです。あるいは「敗種の二乗」とも言われ、二乗不成仏と嫌われて、永久に成仏ができないとされてきたのであります。

また、二乗が嫌われた理由は、もう一つありまして、二乗は現世に対する執着^たを断つた聖者ではありますが、現実逃避的あるいは自己中心的であり、自己の得脱だけを願って、利他の行すなわち多くの人を救済しようという大乘の精神に欠けております。したがって、大乘から「小乗」と名指しで非難された二乗の人達は、大願も大慈大悲もなく、また一切の功德を求めようとせず、ただ自分自身の生老病死の苦しみから脱することのみを求めるため、利己的であるとして嫌われ、二乗は永久に仏に成れないと言われてきたのであります。

ですから、釈尊は、

「設^{たと}ひ犬^や野干^{かん}の心をば発^おこすとも、二乗の心をもつべからず、五逆十悪を作りて地獄には墮つとも、二乗の心をもつべからず」(御書 一三一五^ぎ)

と仰せられております。つまり、たとえ犬や野干、すなわち狐のような畜生の心を起こすことがあっても、二乗の心だけは持つてはならない。また、たとえ五逆罪や十悪を作つて地獄に墮ちようとも、二乗の心を持つてはならないと、厳しく禁じられているので

あります。

ですから、二乗には「悪道におちざる程の利益」すなわち、小さな利益はありますけれども、それは釈尊の本意とするところではなく、たとえ地獄に墮ちたとしても、「**仏になる法華經を耳にふれぬれば、是を種として必ず仏になるなり**」と仰せられ、仏になる法華經を耳に触れるならば、それが種となって成仏の実を結ぶのであるから、たとえ「地獄には墮つとも、二乗の心をばもつべからず」と、厳しく仰せられているのであります。

もちろん、この二乗も、最終的には法華經に来て、成仏が許されるわけであります。つまり「二乗作仏」と「久遠実成」ということは、法華經に来て初めて明かされた、大事な御法門であります。

もっとも、利己的で自己中心的な考えを言う「二乗根性」は、本来の信仰の在り方からすれば、おかしいと思います。自分だけのために、いくらお題目を唱えても、だめですよ。

「末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり」(同 一五九四)

ですから、やはり折伏をしなければ本物ではありません。

だから、時々「私は一生懸命、信心をしているのだけれども、なかなか功德がない」と言う人がいますけれども、では、どういう信心をしているのか。それが自分のためだけの信心であるならば、それは二乗根性に等しい信心ですから、そこには本当の功德はありません。

広宣流布というのは化他行ですから、広宣流布を忘れた信心であるならば、いくら行っても意味はありません。そこに我々が毎日毎日、折伏を行じていく尊い理由があるのであります。

さて、次に「されば天台・妙樂も此の心を以て、強ひて法華經を説くべしとは釈し給へり。譬へば人の地に依りて倒れたる者の、返つて地をおさへて起つが如し。地獄には墮つれども、疾く浮かんで仏になるなり」と仰せられ、法華經こそ最勝の教えである故に、天台大師も妙樂大師も「強ひて法華經を説くべし」と釈せられていると仰せになっているのであります。

すなわち、天台大師は『法華文句』に、

「本已に善有り、釈迦は小を以て之を將護したもう。本未だ善有らざれば、不輕は大を以て強いて之を毒す云云」(学林版文句会本下 四五二)

と述べられております。つまり、末法本未有善の衆生に対しては「而強毒之」すなわち「而して強いて之を毒す」と読みますが、これは正法を信じない衆生に対して、強いて法華經を説いて仏縁を結ばせることで、折伏と同義であります。そのように、本未有善の末法の衆生に対しては而強毒之して、不輕菩薩の行化の如く、強いて法を説いて逆縁

を結び、もってそれらの衆生を救うべきであると仰せになっているのであります。

つまり、末法本未有善の衆生は福德が薄く。自ら妙法を求めることは、ほとんどありません。もちろん、皆さん方のなかには自ら求めて大聖人様の仏法に帰依した方がいるかも知れませんが、ほとんどの人はそうではないと思います。それは本未有善だからですが、だからこそ、そういう人達をどのようにして折伏するかが問題です。そこで、敢えて三毒の心を起こさせて「毒鼓の縁」を結ばせ、妙法を受持せしめて、仏道を成就させるべきである、と仰せられているのであります。

この毒鼓の縁というのは、謗法の衆生に強いて法華経を説き聞かせることは法華経に縁することになり、たとえ法華経を謗ったとしても、それが成仏の因となることを言い、これを逆縁とも言います。

毒鼓とは毒薬を塗った太鼓のことで、涅槃経のなかに「毒を塗った太鼓を大衆のなかで打つと、聞こうとする意志がなくても、この太鼓の音を聞いたならば皆、死んでしまう」という趣旨の文があるのです。このことから、たとえ法を聞こうとせず、反対しても、強いて説き聞かせる、ことにより、やがて煩惱を断じて得道できるということを、その毒鼓を打つことに譬えているのであります。

つまり、一切衆生には皆、仏性が具わっており、正法を聞いて発心し、そして修行することによって成仏得道することができるのでありますから、末法今時では、順縁の衆生はもとより、逆縁の衆生であっても、三大秘法の南無妙法蓮華経を聞かせて正法と縁を結ばせることにより、将来、必ず救済することができるのであります。

このことは折伏を実践する上において、極めて大切なことでもあります。

さて、この『法華文句』は天台大師の著作であります。これについて妙楽大師が解釈をされた『法華文句記』という文献があります。そのなかに、

「問う、若し謗ずるに因って苦に墮せば、菩薩何が故の為に苦の因と作す。答う、其れ善因無ければ謗ぜざるも亦墮す。謗ずるに因って悪に墮すれば必ず由って益を得。人の地に倒れて還って地に從って起つが如し。故に正謗を以て邪墮を接す」(同 四五五)

と仰せであります。これは、妙楽大師が『法華文句記』において法華経の不軽菩薩品を釈するなかで、逆縁の功德を説かれた文であります。すなわち、初めに問いとして、

「菩薩が大乗の法を説くのに對し、これを聞かずに謗る者があると、その罪によって苦しみを受け、三悪道に墮ちると定められているが、では何故、一切衆生を地獄や餓鬼道に墮とすような法を、わざわざ菩薩が説くのであるか」

という質問を述べられます。この質問に対する答えとして、

「法華経の力は偉大なるが故に、強いてこれを説き聞かせるならば、たとえその人が誹謗正法の罪によって悪道に墮ちたとしても、必ず逆縁によって正法に入る功德を受けることができるのである。

なぜなら、末代幼稚の邪智謗法の衆生は、常に悪業の因縁を作っている。したがって、妙法を聞いても、聞かなくても、三悪道に堕ち、六道を輪廻して苦しんでいるのである。

そうであるならば、強いて法華經を説き聞かせ、もし、それを信ずれば、そのまま大きな功德を頂戴することになる。逆に、仮りに謗じたとしても、いったんは三悪道に堕ちて大苦悩を受けるが、妙法の最勝の教えに縁したことによって、のちに必ず正法信受の大功德を受けることができるのである。

それはあたかも、地面につまずいて倒れた者が、再び地面に手をつけて立ち上がるようなものであって、こうして正法を誹謗させることにより、邪見・墮悪道の衆生を救うのである」

と仰せになっているのであります。

前にも話したことがあります。大聖人様は『上野殿御返事』に、

「天竺てんじくに嫉妬しつとの女人あり。男をにくむ故に、家内かないの物をことごとく打ちやぶり、其の上そにあまりの腹立はらだちにや、すがたけしきかわり、眼まなこは日月の光のごとくかがやき、くちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて、年来としごろ男のよみ奉る法華經の第五の巻をとり、両の足にてさむざむにふみける。其の後命つきて地獄じごくにをづ。両の足ばかり地獄じごくに入いらず。獄卒鉄杖てつじょうをもつてうてどもいらず。是これは法華經をふみし逆縁の功德による」(御書 一三五八頁)

と仰せられています。

すなわち、インドに非常に嫉妬深い女人がいて、夫を疑い憎むあまり、ことごときに当たり散らし、家の物を壊すなど荒れ狂い、あまりの腹立たしさに、怒りを露わにして、眼は日月の光のように異様に輝き、口は炎を吐くが如く、その姿はまるで青鬼・赤鬼のようで、その上、亭主が毎日読んでいた法華經の第五の巻を両足で散々に踏みつけたのであります。その後、当然の如く女人は地獄に堕ちましたが、獄卒が杖をもって打てども、どうしても両足だけが地獄に堕ちなかったという話であります。

これは「法華經をふみし逆縁の功德による」と仰せのように、両足で法華經を踏みつけたことが逆縁となって、地獄に堕ちなかったという話であります。つまり、成仏得道のためには、たとえ逆縁であつても法華經に縁することが、いかに大事であるかを教えているのであります。

私達の折伏においても、素直に話を聞く人はおりません。本当にまれに、そういう方がいらっしゃるかも知れませんが、多くの方は、まず最初は反対ですね。しかし、それでいいのです。それでも、この法を説いていくことが大事であります。それが逆縁となって、ただいまの上野殿への御書のなかで大聖人様がお示しのように、必ず成仏していくのです。

毒鼓の縁というのも、逆縁の成仏です。ですから、法は、どんな人にも説かなければ

だめなのです。なかには「あの人には言ってもだめだから、折伏しても無駄だ」と勝手に決めつける人がありますが、それではいけません。だれにでも言わなければ、だめなのです。

私は先年、台湾に行った時に、故宮博物館を見学してきました。その時、副館長とお話をする事になり、お話が終わって別の方と話していると、台湾の婦人部の方が副館長と話をしていましたのです。私がそばにいた人に、あの方は何を話しているのですかと聞いたならば、今、懸命に折伏をしているというのです。本当に、チャンスがあればどこでも、大聖人様の仏法は正しいということを語り、一緒に信心しませんかと話しているのです。

私は、それを聞いた時に、台湾の方々の信仰のパワーというものは、本当にすごいなと思いました。時や場所を選ばないのです。チャンスとあらば、どんな時でも、相手を折伏しているのです。

ですから、たとえ相手が反対しても、それが縁となって成仏へ導くことになるのでありますから、逆縁成仏の功德を信じて、我々は声を大にして、折伏をしていかなければならないのであります。

さて、次に「当世の人何となくとも法華經に背く失に依りて、地獄に墮ちん事疑ひなき故に、とてまかくても法華經を強ひて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし、謗ぜん者は毒鼓の縁となって仏になるべきなり。何にとしても仏の種は法華經より外になきなり」と仰せであります。

今、申し上げました通り、末法当今の本未有善の衆生は、直接、法華經を誹謗していても、法華經を誹謗している邪義邪宗を信じて、知ると知らざるとにかかわりなく、法華經誹謗の罪を犯していることになり、地獄に墮ちることは疑いないのでありますから、とにかく法華經を強いて説くべきである。なぜなら、法華經を聞いて信ずる者は直ちに仏と成り、たとえ誹謗する者でも毒鼓の縁となって仏に成るからである、と仰せになっております。

大聖人様は『十法界明因果抄』に、

「慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依って餓鬼道に墮することは、智者に非ざれば之を知らず。能く能く恐るべきか」（同二〇八頁）

と仰せになっております。つまり、謗法の人に親近し、いつの間にか影響を受けて謗法に与同してしまうことが間々ありますが、それを避けるためには、とにもかくにも法華經を強いて聞かせることが肝要だということでもあります。なぜならば、信ずる人は仏に成り、謗ずる者も毒鼓の縁となって成仏するからであります。

ですから、順縁も逆縁も、信謗共に成仏の種子は法華經よりほかにない、南無妙法蓮華經よりほかにないということを知って、折伏に打って出なければなりません。

もちろん、この『法華初心成仏抄』に「法華經」とおっしゃっているのは、法華經の肝心たる寿量品文底秘沈の南無妙法蓮華經のことです。

故に、大聖人様は『観心本尊抄』に、

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば自然じねんに彼の因果の功徳を譲り与へたまふ」(同 六五三)

と仰せられ、また『聖愚問答抄』には、

「此の妙法蓮華經を信仰し奉る一行に、功徳として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし」(同 四〇八)

と仰せになっております。

私達は、まず折伏する時の心得として、相手が誹謗しようが、しまいが、「この妙法蓮華經はすばらしい教えです。この教えを信仰すれば、必ず成仏をするのですよ」ということを、勇気を持って言うことが大事なのです。それを言わないと、下種になりません。下種をして、たとえその時に反対されても、耳をふさがれても、それが必ず縁になります。その確信があれば、どんな人にも折伏ができるのであります。

それを躊躇ちゅうちよして、自分勝手に「あの人に話をしても、だめなんじゃないかな」などと考える。それは、自分自身が勝手に、そのように考えるだけで、それではいけません。「この人を幸せにしよう」という気持ちがあると、自然に、どんな人にも、この妙法の功徳を説くことができるのです。

このことを是非、忘れないで、これからも折伏に精進していただきたいと思ひます。

次に、三番目も同じく『法華初心成仏抄』であります。

3 法華初心成仏抄

女人には五障ごしょうさんじゅう三従と云ふ事有るが故に罪深しと見えたり。五障とは、一には梵天王、二には帝釈たいしやく、三には魔王、四には転輪聖王てんりんじょうおう、五には仏にならずと見えたり。又三従とは、女人は幼き時は親に従ひて心にまかせず、人となりては男に従ひて心にまかせず、年よりぬれば子に従ひて心にまかせず。加様に幼き時より老耄かように至るまで三人に従ひて心にまかせず、思ふ事もいはず、見たき事をもみず、聴聞したき事もきかず、是これを三従とは説くなり。されば榮啓期が三樂を立てたるにも、女人の身と生まれざるを一の楽しみといへり。加様に内典外典にも嫌はれたる女人の身なれども、此の經を讀まねどもかゝねども身と口と意とにうけ持ちて、殊に口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る女人は、在世りゅうじよの竜女・憍曇弥きょうどんみ・耶輸陀羅女やしゅだらによの如くにやすやすと仏になるべしと云ふ經文なり。(御書一三一七―一四行目)

この御文は、法華經こそ女人成仏の要法であることを明かされたものであります。

初めに「女人には五障三従と云ふ事有るが故に罪深しと見えたり。五障とは、一には梵天王、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏にならずと見えたり。又三従とは、女人は幼き時は親に従ひて心にまかせず、人となりては男に従ひて心にまかせず、年よりぬれば子に従ひて心にまかせず。加様に幼き時より老耄に至るまで三人に従ひて心にまかせず、思ふ事もいはず、見たき事をもみず、聴聞したき事もきかず、是を三従とは説くなり」とありますが、ここでは女人の罪業が深い例として「五障三従」を挙げておられます。

「五障」とは、女人には、梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏になれないという五つの障りがあることを言います。また「三従」とは、ここに「幼き時は親に従ひて心にまかせず」「人となりては男に従ひて心にまかせず」「年よりぬれば子に従ひて心にまかせず」と仰せのように、女人は幼い時より老年に至るまで「思ふ事もいはず、見たき事をもみず、聴聞したき事もきかず」という、拘束された不自由な生涯を送っていることを言うのであります。

今は違いますね。人によっては逆転しています。ただ、当時はこうだったということです。

そもそも爾前経では、女人はたいへん罪深い身であるとされておりまして、成仏は全く許されず、しかも種々の悪業を作るとされていたのであります。このことを当抄には、「華嚴経には『女人は地獄の使ひなり能く仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し』と云へり。銀色女経には『三世の諸仏の眼は抜けて大地に落つるとも、法界の女人は永く仏になるべからず』と見えたり。又経に云はく『女人は大鬼神なり、能く一切の人を喰らふ』と。竜樹菩薩の大論には『一度女人を見れば永く地獄の業を結ぶ』と見えたり」（御書 一三一七）

と仰せられ、華嚴経や銀色女経などの文を挙げられて、女人が罪障深き者であることを示されておりまして。これらの文によれば、「地獄の使ひ」「内心は夜叉」「永不成仏」「大鬼神」等と言われ、成仏できないばかりか、種々の悪業を積んでいくのが女人であるということで、本当に嫌われているのであります。

ただし、ここで大事なことは、このように嫌われている女人であっても、法華経によって必ず救われる、女人成仏は妙法蓮華経による以外には絶対にはかなえられないということを、大聖人様はおっしゃっているのであります。ここに引かれているのは爾前経等ですから、その通りに受け取る必要はありません。

法華経は「十界皆成」とか「悉皆成仏」と言われるように、たとえ地獄の衆生であっても成仏するのでありまして、この力は妙法にしか具わっていないのであります。したがって、我々が南無妙法蓮華経と唱えていくならば、いかなる困難や悩みも解決していくことができるのでありますから、常にお題目を唱えて、あらゆる問題を乗りきっていくことが大事であります。

次に「されば榮啓期が三樂を立てたるにも、女人の身と生まれざるを一の楽しみといへり」とあります。この「榮啓期が三樂」とは『列子』の天瑞編に出てくる話であります。

すなわち、孔子が泰山に旅をした時のことでありますが、鹿の皮の着物を着て、縄の帯を締め、琴をかき鳴らしながら、広野のなかでいかにも楽しげに歌っている榮啓期を見かけた孔子は「あなたは、何がそんなに楽しいのですか」と尋ねたのです。それに対して榮啓期が、

「私の楽しみは、とてもたくさんあるけれども、天が生んだ万物のなかで、人間そのものが最も貴い。私はその人間に生まれることができた、これが第一の楽しみである。

また、人間には男女の別があり、男尊女卑の習わしで男が尊いとされるが、私はその男に生まれることができた、これが二番目の楽しみである。

さらに、人間のなかにはお天道様も拝まずに、赤ん坊のうちに死んでしまう者がいるにもかかわらず、私は既に九十歳になった、これが三番目の楽しみである。

貧乏は男の定、死は人生の終わり。定めに安んじ、終わりを全うできるなら、何をくよくよと思ひ悩むことがあろうか」

と答えたことに由来している話であります。

これはまだ、男尊女卑の思想があった時代の話ではありますが、三樂のなかに、男に生まれたことが一つの楽しみだと言っているわけです。つまり、この前の引文に、女の方は成仏しないと書かれておりますので、それと対比する形で、この榮啓期の楽しみについて述べられているのであります。

したがって、次に「加様に内典外典にも嫌はれたる女人の身なれども、此の經を讀まねどもかゝねども身と口と意とにうけ持ちて、殊に口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る女人は、在世の竜女・憍曇弥・耶輸陀羅女の如くにやすやすと仏になるべしと云ふ經文なり」とおっしゃっております。

つまり、内典にも外典にも不成仏と嫌われた女人の身であったとしても、また、その女人が法華經を讀まなくても、あるいは法華經を書写しなくても、身口意の三業にわたって妙法蓮華經を受持し、ことに口に南無妙法蓮華經と唱える女人は、釈尊在世時代の竜女、あるいは憍曇弥、あるいは耶輸陀羅女のように、やすやすと仏に成ることができるのである、とおっしゃっているのであります。

「竜女」というのは、皆さんも御承知の通り、蛇身の畜生でありまして、法華經の提婆達多品には、文殊師利菩薩の説法を聞いて即座に菩提心を發し、靈鷲山の會座に列して仏様に宝珠を奉り、成仏の相を現じたことが説かれております。つまり、爾前經では全く許されなかった女人の成仏がこれによって初めて明かされ、さらに歴劫修行をすることなしに速やかに得道する、いわゆる即身成仏義が示されたのであります。これもひとえに、妙法蓮華經の力によるところであります。

また「憍曇弥」は摩訶波闍波提とも称しますが、釈尊の母である摩耶夫人の妹で、摩耶夫人が釈尊を産んで七日後に亡くなったため、夫人に代わって浄飯王の妃となり、釈尊を養い育てた方です。この方は浄飯王の死後、出家を志し、三度、釈尊に請うて出家を許され、最初の比丘尼となりました。そして、法華経の勸持品第十三において、一切衆生喜見如来の記別、すなわち未来成仏の保証を受けたのであります。

そして「耶輸陀羅女」は釈尊の妃で、悉達太子が出家成道して十二年目に迦毘羅衛国に帰った時、化導されて比丘尼となりました。そして、憍曇弥と同じく勸持品において、女人成仏の証しとして具足千万光相如来の記別を受けております。

特に、竜女の成仏につきましても、『開目抄』に、

「竜女が成仏、此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸のもろもろ小乗経には、女人の成仏をゆるさず。諸の大乗経には、成仏往生をゆるすやうなれども、或は改転の成仏にして、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申して、竜女が成仏は、末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」(御書 五六三)

と仰せになっております。

このなかの「改転の成仏」というのは、女人が女身を改めて、男子となって成仏することを言います。あるいは悪人が善人となって成仏することを言いますが、法華経は違います。即身成仏といって、女人は女人のまま、その身そのまま成仏するところに、法華経の功德の大きな所以が存するのであります。

また「一念三千の成仏にあらざれば」云々とありますが、この「一念三千の成仏」とは、同じく『開目抄』に、

「一念三千は十界互具よりことはじまれり」(同 五二六)

と仰せのように、爾前経におきましても十界に差別があり、声聞・縁覚の二は永不成仏と嫌われ、また女人も悪人も不成仏と言われておりました。しかし、法華経に来たって十界互具一念三千が説かれ、舍利弗などの二乗、地獄界の提婆達多、畜生界で女人でもある竜女の成仏が示されて、十界すべての成仏が明かされました。これを「一念三千の成仏」と言われているのであります。

すなわち、法華経以前の諸経には竜女の成仏を許さず、法華経に来て初めて竜女の成仏が明かされましたけれども、これは「挙一例諸」と言って、竜女の即身成仏の現証を挙げて、一切の女人の成仏の例証としているのであります。

この『法華初心成仏抄』のなかに「加様に内典外典にも嫌はれたる女人の身なれども、此の経を読まねどもかゝねども身と口と意とにうけ持ちて、殊に口に南無妙法蓮華経と唱へ奉る女人」云々とあり、法華経を読まない、あるいは書かないけれども、身口意の三業に受持する、特に口に南無妙法蓮華経を唱える、ということが示されています。

これは、法華経の法師品第十のなかに「五種法師」ということが説かれており、その

なかで「受持正行」ということが説かれているのです。つまり、法華經の修行は、受持・読・誦・解説・書写という五つがあります。受持とは妙法を受け持つこと、読とはお経本を見てお経を読むこと、誦とはお経本を見ないでお経を誦んずること、解説とは法を説くこと、書写とはお経を書き写すことで、これらの五種の修行内容があるわけです。

しかし、大聖人様の仏法におきましては、『日女御前御返事』のなかに、

「法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる、即ち五種の修行を具足するなり」（同一三八九頁）

と仰せのように、五種の修行はすべて、受持の一行のなかに入ってしまうのです。天台大師のお言葉に、

「信力の故に受け念力の故に持つ」（同 七七五頁）

と示されるように、信念力をもって御本尊様を受持していく一行に、五種行の功德はすべて収まってしまいます。

専門語のなかに「別体の受持」と「総体の受持」ということがありまして、受持の一行のなかに五種行の功德がすべて収まるから、これを総体の受持と言うのです。それに対して別体の受持は、受持・読・誦・解説・書写という五つの修行を一つずつ行うことですが、末法においては総体の受持、すなわち、この御本尊様を受け持つところに、他の四つの修行の功德が収まると説かれるのでありまして、このことを「受持正行」と言うのであります。

つまり、南無妙法蓮華經をしっかりと受持する、信念力をもって妙法を受持するところに、他の四つの行の功德も収まってくるのであります。

それでは、四番目の御文を拝読いたします。

4 法華初心成仏抄

およ凡そ妙法蓮華經とは、我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と、三世諸仏の解りの妙法と、一体不二なる理を妙法蓮華經と名づけたるなり。故に一度妙法蓮華經と唱ふれば、一切の仏・一切の法・一切の菩薩・一切の声聞・一切の梵王・帝釈・閻魔法王・日月・衆星・天神・地神・乃至地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天・一切衆生の心中の仏性を唯一音に喚び頭はし奉る功德無量無辺なり。（御書一三二〇頁一三行目）

初めに「およ凡そ妙法蓮華經とは、我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と、三世諸仏の解りの妙法と、一体不二なる理を妙法蓮華經と名づけたるなり」と仰せであります。つまり妙法蓮華經とは、我ら衆生と、人・天・二乗・菩薩などのあらゆる境界の衆生が本来的に具えている仏性と、三世の諸

仏が悟られた妙法と一体不二であるという道理を、妙法蓮華經と名づけたのであるとの仰せであります。

そもそも、妙法蓮華經の五字については、たくさんの解釈がありますけれども、例えば『四信五品抄』には、

「妙法蓮華經の五字は經文あらに非ず、其の義に非ず、唯一部ただの意いならくのみ」（御書 一一一四ぎ）

と、妙法蓮華經の五字とは、法華經の文でもなく、義でもなく、一部こころの意であるとおっしゃっているのであります。

その「文」とは、一部八卷二十八品の能詮のうせんの文字です。能詮とは、真理を説き明かす教法のことでありまして、所詮に対する語であり、經文などの文句を能詮と言ひ、そこに説かれている内容・法義を所詮というのであります。また「義」とは、法華經の本門と迹門の文、すなわち能詮の文字によって説き出される意義、いわゆる一念三千などの法義・義理を言ひ、その「意」とは、文と義によって顯される趣旨、すなわち根本・肝要・元意を言ひまして、文底下種の妙法をもって「一部こころの意」すなわち、法華經の元意とするのであります。

日蓮宗の者達は、このところが全く解っておりません。したがって、妙法蓮華經とは法華經を要約したものであるとか、法華經の題号のように考えていますが、そうではなく、法華經の体たいであり、意こころそのものなのであります。すなわち、この南無妙法蓮華經こそ、久遠元初本因妙名字即の、凡夫即極の仏様の証得するところの妙法であり、根本の大法でありまして、また三世の諸仏が成道する根源の法であります。故に『秋元御書』に、

「三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」（同 一四四八ぎ）

と仰せられているのであります。

さらに『三大秘法抄』には、

「問ふ、所説ようごんの要言の法とは何物ぞや。答ふ、夫それ積尊初成道より、四味三教乃至法華經の広開三頭一の席こうかいさんけんいちを立ちて、略開近頭遠りゃつかいごんけんのんを説かせ給ひし涌出品まで秘せさせ給ひし処の、実相証得そのかみの当初修行し給ふ処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」（同 一五九三ぎ）

と仰せられ、この妙法蓮華經には、本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目の三大秘法総在の義を含むことを明かされているのであります。

よって「凡そ妙法蓮華經とは、我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と、三世諸仏の解りの妙法と、一体不二なる理を妙法蓮華經と名づけたるなり」と仰せられた御文意を拝しますると、三大秘法総在の妙法蓮華經を挙げて、所具所証の義に約して仏性たる境きょうを示し、その能具能証に約して諸仏の

悟りである智を示して、その一体不二の理を説かれ、もって境智冥合人法一箇の妙法蓮華經をお示しあそばされているのであります。

次に「故に一度妙法蓮華經と唱ふれば、一切の仏・一切の法・一切の菩薩・一切の声聞・一切の梵王・帝釈・閻魔法王・日月・衆星・天神・地神・乃至地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天・一切衆生の心中の仏性を唯一音に喚び頭はし奉る功德無量無辺なり」と仰せであります。これは三大秘法総在の妙法蓮華經のなか、別して本門の題目を挙げられ、ひとたび妙法蓮華經と唱える、ただ「一音」によって、十界の衆生の心中の仏性が呼び頭され、その功德は無量無辺であると、南無妙法蓮華經と唱える意義と功德を示されているのであります。

すなわち「一度妙法蓮華經と唱ふれば」云々と仰せのように。宇宙法界のすべての存在の仏性を、ただ「一音」において呼び頭すということは、これはまさに、自分だけではなく、宇宙法界の全体にわたって一切を回向して、その功德が一切の仏性を呼び頭すこととなり、したがって、その功德はまことに無量無辺であると仰せられているのであります。

さて、次に五番目の御文を拝読します。

5 法華初心成仏抄

我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて、我が己心中の仏性、南無妙法蓮華經とよびよばれて頭はれ給ふ処を仏とは云ふなり。譬へば籠の中の鳥なれば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し。空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し。口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず頭はれ給ふ。梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ。仏菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ。(御書一三二〇第一六行目)

この御文は、先の四番目の御文に続いての御文であります。

初めに「我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて、我が己心中の仏性、南無妙法蓮華經とよびよばれて頭はれ給ふ処を仏とは云ふなり」とありますが、これは久遠元初の仏様の悟り、お振る舞いについての妙釈であります。

まず「我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて」と仰せであります。この「我が己心の妙法蓮華經を本尊」とするということは、これは仏様に約するお言葉なのであります。つまり「我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉り」と仰せの「己心」とは、迷いの凡夫たる我々の己心ではなくして、まさしく久遠元初の本仏己心所具の、境妙の本尊を指すのであります。

そして、次の「我が己心中の仏性、南無妙法蓮華經」とは、同じく己心の智妙を「仏

性、南無妙法蓮華經」として挙げられ、「よびよばれて顕はれ給ふ処を仏とは云ふ」とは、智は境を呼び、境は智に呼ばれて、境智冥合一体不二となり、久遠元初自受用身即一念三千、いわゆる人法一箇の尊体となって顕れ給う境界、すなわち本尊を示されているのであります。したがって「己心」とは、一往付文の辺は我ら一切衆生の己心であります。再往元意の辺は久遠元初の御本仏の己心を指すのであります。

すなわち、この御文は、妙法蓮華經を照らし出すところの智慧を示して、その智慧の当体において。これも妙法蓮華經であり、すなわち智の妙法蓮華經であり、そして、それは境の妙法蓮華經に南無するというのでありますから「南無妙法蓮華經」となるのであります。

したがって、このところを間違えて「我が己心を仏とするのであるから、御本尊は不要である。自分の心に対して南無妙法蓮華經と唱えればよい」などと考えるのは、大きな間違いなのであります。

次の「譬へばかご籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し。空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し」とは、前文の本尊における境智冥合の譬えを、ここにおっしゃっているのであります。

初めの「籠の中の鳥なけば」とは、信心を起こして南無妙法蓮華經と唱え奉ること、すなわち智妙に譬え、次の「空とぶ鳥のよばれて集まる」とは、この智妙の信心に対して、本尊と崇め奉る己心の境妙法蓮華經は、唱題の呼び掛けに応じて、その体徳を顕されることに譬えるのであります。これすなわち、御本仏宗祖日蓮大聖人様の己心己証の妙法であり、末法の一切衆生のために顕し給う、妙法大漫荼羅本尊であります。

また「空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し」とは、「籠の中の鳥」すなわち、三界のなかの苦しみに喘ぐ我ら衆生も、御本尊の勝能に引かれて菩提心を起こし、正道を求めて仏道を成就することに譬えているのであります。

次に「口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕はれ給ふ。梵王・帝釈ぼんのう たいしゃくの仏性はよばれて我等を守り給ふ。仏菩薩の仏性はよばれてよろこ悦び給ふ」と仰せであります。三大秘法総在の題目を唱え奉れば、よく一切の仏性に通じ、我が身の仏性も呼ばれて必ず顕れるだけでなく、さらに梵王や帝釈の仏性も呼ばれて、我々を守護するとの仰せであります。

ここに示される、大梵天王や帝釈天王などの諸天善神は、法華經の行者を守護するとともに、民衆や国土を守り、福をもたらす用はたらきを持つのであります。法華經の安樂行品第十四には、

「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之しか これを衛護す」(法華經 三九六ぶつ)

とあって、法華經の行者の守護を誓っております。さらには、末法の法華經である三大秘法の御本尊のなかに諸天善神したた ゆえんか認められている所以も、ここに存するのであります。

つまり、梵王や帝釈等の諸天善神は、正法を受持する人が法華經を聞くことを喜ばれ、

その人を守っていくのが、その役目であります。

だから、我々が一生懸命に自行化他の信心に励みますと、諸天善神が様々に姿を変えて私達を守ってくれます。これはそもそも、御本尊の功德によるのであって、諸天善神そのものを拝むということではありません。世間では、帝釈天を拝んだり、鬼子母神を拝んでいる人もおりますが、それらは信仰の対象ではありません。あくまでも、御本尊様が信仰の対境であります。その御本尊様を拝む人を、諸天善神は守護するということです。

帝釈天を拝んでも、帝釈天は守りませんし、鬼子母神を拝んでも、鬼子母神は守りません。御本尊様を拝む人を守るのが、諸天善神の役目なのです。すべての根源が、妙法にあるわけです。その妙法を信仰する人を守護するところに、諸天善神の用きがあるわけで、その意味からも我々は、朝の勤行において、諸天善神に法味を捧げている次第であります。

時間か迫ってまいりましたので、本日の講義はここまでといたします。

なお、最初にも申し上げましたように、明年の三月は、もう十ヵ月を切っておりますから、またたく間に来てしまいます。どうぞ、それぞれ御自宅にお帰りになりましたならば、心を新たにして、誓願達成のために僧俗一体、一致協力して御精進をいただきたいと思っております。

明年の三月に登山した時に、うなだれて歩かなくてもいいように、頑張っていたきたいと思っております。そして、みんなで堂々と胸を張って、御本尊様に我々の姿を見ていただこうではありませんか。それが、今、我々に課せられた大事な使命であると思っておりますので、いよいよの御精進を心から願うものであります。

以上をもちまして、講義を終了いたします。